

平成 29 年度 第 2 回文化財審議会議事録

開催日時 平成 29 年 11 月 22 日（水） 14 時 00 分～17 時 00 分

開催場所 多治見市文化財保護センターロビー

出席委員 小木曾郁夫 深谷滋浩 谷口幸子 平林史孝 水野卓夫 立花 昭

欠席委員 齊藤基生 加藤桂子 長谷川幸生 藤澤良祐

事務局出席者	多治見市教育委員会	教育長	渡邊哲郎
	文化財保護センター	所長	仙石浩之
	〃	主査	市岡 聡
	〃	嘱託学芸員	三浦哲史
	〃	嘱託学芸員	岩井美和

(進行内容)

- 1、開会のことば
- 2、教育長あいさつ
- 3、会長あいさつ
- 4、議事録署名者の決定
- 5、白天目工房視察
- 6、議事
 - (1) 諮問事項
 - ・白天目について
 - (2) 審議・報告事項
 - ①指定文化財について
 - ・平成 29 年大雨等による災害被害状況について
 - ・新羅神社社殿防災設備設置工事について
 - ・永泉寺惣門修理について
 - ・カメムシ被害調査の結果について
 - ・平成 29 年度北小木川のカワニナ生息数調査結果について
 - ・ヘイケボタルについて
 - ・虎溪山山湿地の樹木伐採について
 - ・多治見国長邸跡の門・塀修理について
 - ②普及啓発について
 - ・こけいざん森の家フェスティバル、文化財講座、分室展示、職場体験
 - ・平成 29 年度企画展「陶器将軍 加藤助三郎（仮）」について
 - ③埋蔵文化財について
 - ・試掘・発掘状況、整理作業・報告書作成作業及びその他

7、その他

- ・ コウモリ調査について
- ・ 仏像材質分析調査について（資料非公開）

議事録署名者選出

事務局から、水野委員・立花委員を指名、承認。

白天目技術保持者工房視察

白天目技術保持者（以下 氏）：多治見市教育委員会が小名田窯下窯を発掘調査した平成 7 年以前から、この地で白天目が焼かれていたことは知られており、昭和 54 年に徳川美術館で開催された「天目展」という展覧会がきっかけで、天目や「白」に興味を持った。平成 7 年の発掘調査で白天目が出土し、それを見せてもらってから、白天目の再現に取り組んでいる。まず粘土探しが必要だったが、なかなか白い碗になる粘土はなく、この土地には長石がなかった。ここで問題になったのは、白を作るには灰ぐすりをどうするかということと、長石質分をどこから持ってくるかということだった。ここに色見を積んでいるが、これはきちんと調合したもの。それまでの色見は天目碗作りの稽古をしながら当てずっぽうで作り、失敗を繰り返し 1000 個くらい焼いたと思う。ある程度目途が立った時に、釉薬を長石、珪石、灰の 3 種類で作るという推測を立てた。珪石はどこからとるかという粘土からとる。粘土はほとんどが珪石である。その中に K_2O （酸化カリウム）という成分が 2.5%程度含まれており、山茶碗でいうと多いもので 3.3%あれば粘土として成立する。そういう土を探していたとき、岩ヶ峠の山茶碗窯の発掘調査地で粘土が見つかった。自信はなかったが持ち帰り作ってみると白くなった。何故白くなるか実証するため、私は五斗蒔の土や小名田の土、私がビスケットと呼ぶ土の 3 種類を調合しテストピースを作り、これに市販の灰と柿野の灰、家庭で作るクヌギの灰など 3~4 種類の灰を使って、灰 100%から珪石 100%、あるいは長石 100%から灰 100%までの組み合わせを試していた。そしてほしい灰 50%、粘土（珪石）50%、それに若干の長石質分の入っている土を入れると白い碗ができるということが分かった。長石質分は、 K_2O が多く含まれる山茶碗に使うような土を入れることで補充できる。

室町時代の釉薬は、志野が作られるようになってからは長石が主成分として使われた。それ以前は灰釉だけだった。平安時代の灰釉陶器を見ると、粘土を混ぜて粘りをつけた灰を刷毛で塗っている。調子の良いものは素地に浸透し白く焼き上がる。では古瀬戸系施釉陶器の釉薬はどうだったかという、瀬戸の窯跡では長石質分の多い土が出土しているが、他所にはない。釉薬はどこの陶器を見ても視覚的には同じに見える。だから当初は瀬戸から美濃へ工人が移ってきた時に瀬戸の釉薬を配ったのかと考えたが、それはできるわけがない。窯を築いた所に粘土があればその近所に釉薬になる土があって、それと生活の中で出る灰を使えば白い碗が作れるということがおぼろげに分かってきた。

なぜこの地で白天目が作られたかという、たまたま上質な白く焼き上がる土があったからだと考える。文化的な面で言うと、お寺の齋会で使用するために作られた。虎溪山永保寺では、昭和の頃の齋会で、わざわざ作らせて使用していたという話を聞いた。齋会は口伝えで行うので、使用した物の書付などは残っていないという。白天目が作られるようになった理由は、お

茶の世界では、武野紹鷗が使っていたことや、白天目が有名で信長や秀吉が取り上げたから、などと表面的には言われている。実は白天目というのが中国の灰褐磁の天目の裾が白いものを白天目と呼んだという説があるが、あくまで説でありまだ分からない。矢部良明氏が書いた『武野紹鷗』という本を読むと、美濃の工人が「白天目」という名前を聞いて白い茶碗を作ったとしている。どの説が本当だということではないが、この土地は山の中で中国産の茶碗を実際に見ることは難しく、情報だけで白天目を作ったのだと考えられる。これは想像で何も確証はないが、1500年代初頭、応仁の乱など戦乱が終わり、この地を治める武将たちが京都から文化を持ち帰り、白天目を工人に作らせたのだろう。愛知学院大学の先生によると、瀬戸で白天目の陶片が出土した窯も南禅寺領だったという。そういうことからいうと、お寺に深い関わりがあると考えられる。

色の出し方と文化的な面について話したが、味わいについては、何百年使用して徳川美術館所蔵の白天目などのようになる。香雪美術館のものは自分が作ったものよりも若干木節系の多い土、藤田美術館のものは発泡が連鎖しているので多少長石分が多い。徳川美術館のものは発泡が大きい。私が作ったものも発泡しているが発泡の大きさが違う。名古屋工業大学の先生曰く石灰が足りないということだが、成分の計算上は十分足りているので、窯の焚き方が原因かと考えている。美術的な価値についてだが、当時の成形技法からいうと、必ずしも今のように玉造りのロクロ成形ではなく、粘土ヒモを輪積みにしてロクロ成形したと考えている。この時代のもものは同じようにロクロを挽いても微妙に形も違って面白いと私は思っている。

小名田窯下窯では全国に類例のない白い焼物が焼かれた。九州鍋島藩の藩窯跡地で白天目が、「日本で初めて焼かれた白い焼物」として写真で紹介されていたのを見て、こんなすごいものを小名田で焼いていたなら、自分もこれを作りたいと思った。また、徳川美術館などに所蔵されている白天目を再現したら世に出られるという欲と、白天目の技術を生かして作れば自分の仕事にもなるという欲を持って取り組んでいる。現在、白天目再現の一環で「青白陶」を作っている。青白陶は瀬戸黒と同じように引き出して急冷させて作る。

委員：色が青みがかったものなど少し違うものがあるが、どう違うのか。

氏：これは同じ土、同じ釉薬で作っており、釉薬の濃さが違ったり、窯の焚き方が違うだけである。

委員：釉のかかっていない土の部分は、初めは白いのか。

氏：初めは白く、人の手で何年か使用すると黒っぽくなる。釉薬は何度も試し焼きして、その内の一つを追及していった。瑞浪陶磁資料館の研究紀要で釉薬のことを書いた。

委員：矢部良明氏は、白天目は灰釉だとしていたか。

氏：矢部氏は灰釉としているが、灰が浸透して白くなると説明している。しかし、灰が浸透して白くなったものを顕微鏡で見ると白天目とは少し違う。おそらく白天目は、長石質分と灰が混ざったものが白く見える。室町時代や大窯の初期のものは釉薬を割ると釉薬と白い層がある。名古屋工業大学の研究によるとその白い層が、長石質分が一番最初に溶けて沈着したものだという。灰は1240度を越さないと溶けないが、長石は低いものは1200度より前に溶けてしまう。

委員：矢部氏はどの段階で、灰釉と言ったのか。

氏：『中国陶磁の八千年 乱世の峻巖美・泰平の真実』（1992年出版）より前に言っている。

（その後天目碗のロクロ成形と、青白陶の見学）

諮問 白天目について

委員：今、白天目技術保持者の工房を見学し、白天目の土や釉薬、成形技法についてお話と実践をして頂いた。感想等あるか。

委員：文献として矢部良明氏が白天目は灰釉という説を出しているが、名実ともに長石釉ではなく灰釉だという仮説を立て実証したのは白天目技術保持者であり、かつ白天目茶碗が志野の祖形といわれていたがそれが全く違うことを示し、陶磁史の通説を覆したのは大きな功績である。それに異を唱えた学者に対しても、実証を以て論破した。また、古来の技術や製品の写しをされる方には、それに終始しそこで終わってしまう傾向が往々にしてあるが、白天目技術保持者は自身のスタイルをどうするかと探求し、研究だけでなく作家としても方向性がしっかり見えている方だと思う。

委員：白天目からの発展形として古白陶・青白陶の製作にも取り組んでいる。

委員：曜変天目は国内に数点しかなく 1 点は国宝に指定されている。白天目も国内に数点しかなく国の重要文化財に指定されており、同じくらいの格がある。曜変天目を研究している瀬戸の長江惣吉氏が NHK で取り上げられた番組が作られたが、青山氏も同じくらい取り上げられていても良いと個人的には思う。

委員：地元・小名田の窯跡で陶片が発見されてから、長年にわたり研究されているのは大変なことである。多治見にとって指定するのは有意義である。

委員：昔からこの辺りで白天目が焼かれていただろうと言われていたが、市の工事がきっかけで発掘調査につながったのは良かった。

委員：現代に発展させるのは難しい。まだまだこれからという感がある。

委員：では次回、答申に向けて改めて議論したい。

議題①指定文化財について

平成 29 年大雨被害等による災害被害状況について

事務局：9 月 17 日から 18 日にかけて台風 18 号が接近したことによる、天然記念物と建造物への影響を調査した。18 件ある中で、永保寺庭園と永保寺境内に被害が見られた。まず永保寺庭園は、黒門から庭園へ続く道沿いの板塀の一部が倒壊した。同じく庭園内の三笑橋南側のヒノキが倒れた。永保寺境内は板塀が一部倒壊した。台風 18 号によりかなり大きな被害が出た。順次修復を進めている。

新羅神社社殿防災設備設置工事について

事務局：9 月から準備・調査を始めて、12 月に工事完了予定である。この工事は、多治見市消防本部より社殿に自動火災報知設備を設置するよう指摘があり、実施している。図面にあるように、拝殿・本殿に自動火災報知設備を設置する。

新羅神社社殿については、以前から文化財建造物に防災設備を設置しなくて良いという県文化財課の解釈だったが、消防としては設置しなければならないというように意見が分かれていた。県の文化財課と消防が話し合った結果、設置したほうが良いという判断になり、今のままでは違反状態となってしまうため、自動火災報知設備を取り付けることとなった。市の補助金

を利用し、新羅神社と氏子さんたちの了解を得て、工事を開始した。

永泉寺惣門修理について

事務局：平成 28 年 6 月 29 日から平成 29 年 10 月 26 日にかけて、永泉寺惣門の修理が行われた。戸上建築設計事務所が設計監理、橋本瓦葺工業株式会社が工事、川端建築計画が耐震診断を担当した。資料には修理前と後、修理中の写真を掲載している。審議会でも昨年にも一度、修理中の惣門を見学している。完成したので、近くにお越しの際は是非お立ち寄りいただければと思う。この修理工事も市の補助金を活用して実施した案件である。

カメムシ被害調査の結果について

事務局：北小木のホタルの保護のため、地元では田への殺虫剤の散布を控えてきた。しかし近年カメムシが大量発生するようになり、平成 26 年度よりヘイケボタルの生息数が少ない地点での農薬の散布を始めた。今回、農薬散布することによりカメムシ被害の軽減が認められるか確認するための調査を行なった。稲の抜き取りを 8 月 29 日、脱穀・唐箕がけ・粃摺りを 10 月 27 日、斑点米調査を 10 月 27 日と 11 月 6 日に行なった。調査結果としては、今年は全地点でカメムシ被害のあった斑点米が非常に多かった。また例年同様、農薬散布していない地点より農薬散布した地点の方が被害は低いという結果になった。これまでの結果から、農薬散布が米へのカメムシ被害防止について一定の効果があると推定されるが、ホタルの生息への影響も併せて考えていかなければならない課題である。

委員：被害が割合少ない A1、A2 地点は元々ヘイケボタルの発生数が少ない。7 月のホタル調査の際は、何匹かは確認できた。だから農薬をまいてもあまり大きな変化はないだろうと思われる。ラジコンヘリコプターで農薬散布するが、川のゲンジボタルの幼虫に影響の出ないように、低空飛行をしてなるべく川に飛ばないように気を付けてもらっているの、今まではあまりゲンジボタルに影響はないように思われる。

平成 29 年度北小木川のカワニナ生息数調査結果について

事務局：今年の北小木川カワニナ生息数調査は、11 月 1 日に行なった。今回は、当初の調査日と予備日が台風により延期となっており、調査日は台風の通過から 2 日後だったが水量は多かった。調査の結果、カワニナの生息数は全体的に去年よりも少なかった。カワニナの体長を見ると、いろいろな大きさのカワニナが満遍なくいることが分かった。ホタル生息数とカワニナ生息数の相関関係について考えると、これまではカワニナの生息数の増減に比例して次の年のホタル生息数も増減する傾向があったが、例外の年もあった。ホタルの発生数はカワニナの数だけではなく天候や気温、河川工事等の環境にも大きく左右されると考えられる。今後もデータを蓄積し、ホタルの保護に役立てていきたい。

ヘイケボタルについて

事務局：資料の地図に、ヘイケボタル保護の範囲を示した。一之洞は拡大図の真ん中の田に三角の範囲、神明洞は拡大図右上の田の奥に長方形の範囲をヘイケボタルの保護地区とした。ヘイケボタルが生息しやすいように溝を掘り、水が溜まるように保護地区を設定した。

委員：毎年田の水を抜いてしまうと、ヘイケボタルの幼虫が生息する場所がなくなってしまうと

ということで、地元の方にご協力いただいて、水が残るようにしてもらった。そこに幼虫が生息してなんとか増えてくれれば良いと思う。

虎溪山湿地の樹木伐採について

事務局：虎溪山シデコブシ群生地保護のため、虎溪山湿地の樹木伐採を実施する。伐採後どのように変化するか様子を見ていく。

委員：資料の四角で囲んだところは現在笹刈りをしている試験地である。丸で囲んだところは湿地の上流部に当たるところであり、もし伐採をするならこの上流部の木を切ることによって蒸散量が減り、湿地の水量を減少させないために効果的ではないかと考えている。また、湿地の中に樹木が入り込んできて、乾燥し陸地化してきている。そういうところは湿地保護のために思い切って伐採して管理するという方向が良いと考えている。この資料に示したところは伐採の候補地として検討している。

事務局：今年度で虎溪山湿地の水量調査は終了する予定だったが、住吉地区での開発が進み、まだ虎溪山への影響がありそうだということで、来年度以降も予算化して調査を続ける予定である。

多治見国長邸跡の門・塀修理について

事務局：平成 29 年 6 月 12 日から 8 月 31 日にかけて、多治見国長邸跡門・塀の修理を行った。修理前の写真を見ると、特に左の門柱の下の部分はかなり劣化しているのが分かる。また、門扉の下の方も大分腐食し、塗装もかなり剥げていた。これらを重点的に修繕した。

議題②普及啓発について

こけいざん森の家フェスティバル、文化財講座、分室展示、職場体験

事務局：8 月 6 日にこけいざん森の家フェスティバルに参加してきた。このイベントには、こけいざん森の家より出展の依頼があり 4 年ほど参加している。8 月初旬から 20 日間ほどロビーで展示を行ない、イベント当日は体験コーナーと虎溪山一号古墳の見学会を開催した。体験コーナーでは今年初めて土器パズルを用意し、その他に火起こしと貫頭衣の体験を用意した。虎溪山一号古墳の見学会は午前 1 回と午後 1 回実施した。

続いて、文化財講座「多治見駅前 ちょっと昔と大昔散策」について。現在開催中の企画展「発見！地中に眠る多治見の歴史」に伴う関連講座で、12 月 16 日に開催予定である。多治見駅周辺の街歩きで、豊岡町・田代町・音羽町のちょっと昔の町の様子や歴史、七ツ塚遺跡の解説をする。講師に「中之郷を語る会」の方を招いて、地元の方に案内していただく。

たじみ茶碗まつりに伴う分室展示について。10 月 8 日・9 日にたじみ茶碗まつりが美濃焼卸団地で開催され、分室展示を行った。毎年、陶磁器関連の展示だけだったが、今年は分室の斜め向かいのこども陶器博物館と連携しクイズラリーを行った。こども陶器博物館から景品を提供していただき、こども陶器博物館と分室に設置されたクイズに全て正解すると景品をプレゼントするという形で実施した。分室の展示は、今までの近代の焼物に加えて、整理作業が終了した根本の民具を活用し、懐かしい道具を見ていただけるように展示した。その中にクイズを散りばめるといった形にした。昨年は 2 日間で来場者 60 人だったが、今年は 654 人来っていた

だけだ。来年についてもまた考えなければならないが、こども陶器博物館の方も非常に協力的で、また一緒にできたら良いという感想をいただいた。

職場体験について。今年も陶都中学校、小泉中学校、南ヶ丘中学校の3校、2年生の職場体験の受け入れをした。先日の南ヶ丘中学校2年生の体験は盛り沢山で、コウモリ調査・東町シデコブシ調査など、元気に楽しく参加してもらった。また、センターロビーの展示だが、10月に来てもらった小泉中学校の生徒に作ってもらった。自分で資料を選び、自分でキャプションを作って展示するという一連の作業を体験した。

平成29年度企画展「陶器将軍 加藤助三郎（仮）」について

事務局：平成30年2月末から開催予定の企画展について、「陶器将軍 加藤助三郎」というタイトルで展示を考えている。昨年は西浦家についての展示を行った。多治見の陶器商で西浦家と共に名前が挙がる人物だが、まだ知名度が低いため是非加藤助三郎という人物を知ってもらえたらと思う。今年には明治150年に当たり、明治にちなんだ展示の中に加藤助三郎の資料を加えながら、集散地としての多治見の町の発展の様子や商人、周辺産業を紹介する。

③埋蔵文化財について

試掘・発掘状況、整理作業・報告書作成作業及びその他

事務局：まず国庫補助事業で行われる試掘の状況から報告する。昨年度は36件、今年度は11月時点で22件となっている。年度中に昨年度の件数と同じか少し増えるくらいかと思われる。続いて発掘・試掘状況を報告する。まず根本遺跡の発掘について、道路河川課から道路側溝敷設のため発掘の依頼があり実施した。9月4日から6日まで短い期間だが、側溝敷設のためだけであり、50～100cm程の幅の発掘で済んだ。根本遺跡は国道248号線建設の時に発掘された集落遺跡である。今回の場所もその範囲内にあるが、248号線から離れるに従って遺跡が薄くなっていく傾向があり、当該土地は248号線から離れた場所にあり遺跡は確認できなかった。2つ目は駅南再開発地区の試掘調査について。現在、平成34年度の開業を目指して駅南での再開発事業が進められている。テラとその駐車場、市営駅西駐車場が再開発地域に指定されている。埋蔵文化財の包蔵地になっていないが、駅北の七ツ塚遺跡と関連性があるため試掘を実施した。駐車場は利用されており大規模な試掘が困難なため事業者及び多治見市市街地整備課との協議で、建物建設予定地内の4ヶ所で試掘を行った。市営駅西駐車場内にA-1とA-2トレンチ、テラ駐車場にB-1とB-2トレンチを開けた。テラ建物の場所は商業塔、A-1とB-2トレンチの辺りに立体駐車場、A-2トレンチの辺りに高層マンションが建つ予定で、それぞれの場所にトレンチを設定した。4ヶ所の試掘から山茶碗が数点出土したが、遺構は確認できなかった。ただ、実際の開発面積に比べて試掘面積が非常に小さかったため、再開発の工事で土地を掘削する際にセンター職員が立ち会い確認する。このことは事業者も市街地整備課も了解済みである。3つ目はリニア中央新幹線試掘調査について。国道248号線と農免道路の交差点のそばにリニア中央新幹線の非常口ができる。この辺りには大針6、7、8、9号古窯跡が位置している可能性があるため、分布調査をすることになった。11月最終週に実施する。4つ目は小泉児童センター建設予定地試掘調査について。建設予定地は小泉町7丁目、小泉中学校のすぐそばで、小泉7丁目遺跡の範囲内である。試掘調査を12月上旬に実施する予定である。

次に整理作業・報告書作成作業について。現在、笠原砂田・総作遺跡及び権現遺跡の発掘調査報告書の作成作業を行っている。これは笠原神戸・栄地区土地区画整理組合からの受託事業として実施しており、平成 29 年度末の刊行に向けて執筆作業を続けている。

次に来年度の予定について。まず、大畑赤松 4 号古窯跡発掘調査の実施を予定している。岐阜県が施工する国道 248 号線と滝呂町の県道豊田多治見線をつなぐバイパス建設に伴う発掘調査である。事業主体である岐阜県多治見土木事務所の意向では、来年度早々に発掘調査に着手して欲しいということで、緊急発掘費で実施する。2 つ目に、大針古窯跡群発掘調査を実施予定である。先述したリニア中央新幹線関連の発掘調査で、JR 東海の意向では来年度着手して欲しいということだが、時期は未定である。

その他の報告である。まず 1 つ目に埋蔵文化財の問い合わせについてだが、不動産業者からの埋蔵文化財包蔵地に関する問い合わせが増えている。昨年度は年間 269 件に対し、今年度は 11 月 14 日時点で 305 件と優に超えている。昨年と同時期での問い合わせ件数は 140 件であるので、2 倍強の増加率である。これは不動産業者の埋蔵文化財に対する意識向上と、市内の開発が活発になってきていることが理由として考えられる。今後、問い合わせ件数と試掘・発掘調査等の事務量は増加すると思われる。2 つ目は笠原東公園内の遺跡解説看板についてである。これは笠原町神戸・栄地区土地区画整理組合から、新たに建設される笠原東公園内に砂田・総作遺跡及び権現遺跡の解説看板を設置して欲しいという要望があった。看板の内容については文化財保護センター、看板作成費用は公園を作る緑化公園課の予算で対応する。来年度建設予定である。

7、その他

コウモリ調査について

事務局：11 月に愛岐 7 号トンネル内のコウモリ調査を行なった。資料の表にあるように、コキクガシラコウモリは前回調査に比べて若干減少傾向にあるが、キクガシラコウモリはほぼ横ばいである。また、ユビナガコウモリは減少、モモジロコウモリは 0、テングコウモリは横ばいの 1 頭という結果だった。

仏像材質分析調査について（資料非公開）

事務局：市内寺院所有の仏像について、材質分析調査を平成 29 年 9 月 28 日に大阪大学で行った。まだ分析結果が出ていないため材質については報告できない。この仏像は全国でも非常に貴重なものである可能性が高い。こちらの資料については非公開でお願いしたい。

加藤助三郎家文書について

事務局：平成 28 年度まで行ってきた西浦家文書の整理・調査に引き続き、加藤助三郎家文書も来年度予算化して調査を行なうということだったが、文化財保護センターのその他の事業等の予算との兼ね合いもあり、泣く泣く来年度の予算化を見送ることにした。加藤助三郎に関していえば、西浦家に比べて市民の方の認知度が低いため、企画展などを通して市民の関心を高め、古文書調査も必要だという気運を高めたいという思いもある。

(質疑)

委員：普及啓発のたじみ茶碗まつりの分室展示で、根本の民具を活用してもらった。根本交流センターでもそれらの民具を展示したことがある。なかなか昔の暮らしの道具というのはちゃんと見る機会がない。教科書の小さな挿絵では分からないことが多いので、お客さんの関心も高かったと思う。

加藤助三郎家文書について、予算化は難しそうだが、企画展などで関心を持ってもらえれば良い。いずれは目録を作らないと活用できない。貴重な資料なので是非調査をしたい。

事務局：陶器商という商売なので、その業界団体の一部でも巻き込んで関心の高まりを見せることができたと思う。

委員：聞いた話だが、たじみ創造館を多陶商が購入して、そこで展示をやりたいと考えていると言う。センターと連携して何か企画できたら良い。

事務局：創造館で、多治見陶器商人の歴史を常設展と企画展をつくる。その常設展で、センターが所有する陶器商関連の見本カバンなどの民具資料やアイデアを貸してもらえないかと話を頂いている。企画展示の方では、センターで以前やったものをアレンジして、多陶商の方からも資料を加えて展示したいと考えているようだ。ここでの展示のメインは、西浦圓治と加藤助三郎の二本立てになる。

委員：『陶器商報』は色んな人が引用しており、有名な資料である。国立国会図書館は近代文書などをインターネットで公開している。多治見市でも資料をデジタル化して公開すれば、より多くの人の関心を集められる。取っ掛かりやすい方法だと思う。

委員：『陶器商報』は全号あるか。

事務局：1号から150号までは多治見市で持っている。それ以降を瀬戸市が持っている。個人でお持ちの方もいるかもしれないが、公的機関で閲覧できるのは多治見市と瀬戸市だけである。色んなところから調査に来る。

委員：瀬戸市は目録を作ったか。また公開はしているか。

事務局：目録は作っていない。図書館ではなく資料館で持っていると思うが、公開の仕方は分からない。あまりオープンになっている資料ではないのでもったいない。

委員：私的な資料ではなく、公的な資料なので、なるべく公開という形をとってほしい。

埋蔵文化財についてだが、問い合わせ件数に驚いている。現状の職員で足りているか。

事務局：現状の職員で何とか対応している。

委員：もっと職員の人数が充実すると良い。その他、仏像について今後どうするのか。

事務局：仏像が日本で十数体しか発見されていない、貴重なものである。近隣でも見つかっていない。材質分析することで、時代も判明する。像を見てもらった先生方によると、今のところ南北朝時代頃まで遡れるのではないかという。江戸時代より前に作られたことは確実といえる。

はじめに市内の寺院が仏像を研究されている方に見てもらい、南北朝時代頃ではないかと言われ、その後岐阜県博物館の学芸員や岐阜県文化財審議会の仏像担当の方に見てもらったが、はっきりと分からないため、材質分析をすることになった。部分によって含まれている成分が違っているようで、その辺りも報告書で分かると思う。また、作り方に関して4つの鋳型を用いて作っているのではないかという。

委員：普段はどのように保管されているのか。市内の寺院にあったというのは、宗派も関係して

いるのか。

事務局：小さい厨子の中に収められている。住職が掃除している時に見つけたという。先代の住職も知らなかったという。寺の宗派とも関係している可能性はある。今年度夏と冬に大学の先生と一緒に市内の寺院の文書の調査を行なっているが、その中で仏像に関わる史料があると良い。市内の寺院は一度洪水に遭って水損したものもあり、流失した資料もあるかもしれない。